

# 仁科記念財団

## 案 内

1985年3月

財団法人 仁科記念財団

## 仁科記念財団案内 まえがき

仁科記念財団は、記念講演の記録を載せる広報誌 NKZ に、最近の年度の活動報告を附記するようにしてきました。それは、理事会・評議員会に提出する「事業報告および収支計算書」の内容の一部ですが、それをなるべく広い範囲のかたがたにも伝えて、財団について関心を深めていただきたいためにほかなりません。ところが、それだけだと、かつてのような出版活動の沈滞のためになくとも、最近おきている事態のように、英文の出版物が続けざまに和文の NKZ のあいだに入りこみますと、「活動報告」がとどこおって、たまってしまうことになります。また、講演記録を主とする NKZ は、講演に興味をもって、購読なさるかた、講演会を聴きに来られるかた以外に対して、財団に関する広報をおこなう手段としては、十分とは申せません。

戦前の財団法人理化学研究所は、欧文と和文の研究報告の出版のほかに、毎年、各研究室の研究題目と担当研究者の職・氏名を記した質素な小冊子を出していました。それには「寄附行為」という名の、会社などでは「定款」と呼んでいるものに当る文書も掲載されていました。その小冊子につけられていた「理化学研究所案内」という、かぎり気のない名称は、当時の「理研」の気風をよく表わしていたように思います。今回つくったこの小冊子にもそれにあやかる名前をつけました。仁科記念財団に対して、すこしでも多くのかたに親しみをもっていただき、支持者になつていただくのに役立てば幸いと存じます。

## 目 次

§ 1. 今年は仁科記念財団創立30周年にあたります .....	1 頁
§ 2. 仁科記念財団のおこなっていること 七つ .....	2 頁
§ 3. 仁科記念講演会について .....	3 頁
§ 4. 仁科記念研究奨励金について .....	6 頁
§ 5. 財団出版物の有料頒布について .....	7 頁
§ 6. 仁科記念財団の活動——昭和 58 年度と 59 年度—— .....	8 頁
§ 7. 「財団法人仁科記念財団設立趣意書並びに寄附行為」(抄) .....	16 頁
役 員 名 簿 .....	22 頁

## § 1. 今年は仁科記念財団創立30周年にあたります

今年は仁科記念財団の創立30周年にあたります。当財団は、戦後最初の学術振興財団として発足して以来、故仁科芳雄博士に対する国内および国外の科学者たちの敬愛に支えられ、ひろく国の各界のご支援を得て、意義ある活動を続けてきました。この尊い伝統の上に立って新たな飛躍をするために、本年度はつぎの二つを大きな柱にしようと思います。

第一は、ニールス・ボーア生誕百年を記念して、国際学術交流推進の活動をおこなうことがあります。コペンハーゲンのニールス・ボーア研究所は、1921年に「理論物理学研究所」として発足して以来、一貫してさまざまな国のある研究者を集めた共同研究の道場であり、そこに1923年から6年間学んだ仁科博士は、長岡博士にボーア教授招聘を提案した手紙（1928年1月）のなかで、ここで学ぶことは、さまざまな国の前途有為の研究者と交わることができる、その点を考え、また殊に多くの日本人研究者が世話をしているそのお礼の意味からも、ぜひ招聘するようにはからってほしいと書いています。第二次世界大戦後は、同様な性格をもつ研究所がいろいろな国にいくつか出来ていますが、ボーア研究所はいまもその一つであり、わが国でも30名を超える研究者がそこに学んだ経験をもっております。

ボーア教授は、科学の面だけでなく、もっと広い意味でわが国の恩人であります。戦後の経済の崩壊と被占領の時代に、国の再建に奮闘した仁科博士を励まし、博士の科学使節としての訪欧（1949年）や訪米（1950年）のために援助を惜しまず、それがひいてはわが国の国際社会への速やかな復帰に大きな力となったのでした。

ボーア教授の没後、ボーアの高弟メラー、ローゼンフェルト、ストレームグレンから、1970年に朝永博士にあてて、ニールス・ボーア研究所がその伝統をまもって活動し、ことにその範囲をアジアの諸国の科学者との交流にひろげるために、日本からも財政的支援をえられるよう、あっせんしてほしいという意味の手紙がとどきました。朝永博士は、当時仁科記念財団の理事長でしたが、財団の理事たちにはかった結果、ニールス・ボーア研究所の日本における代理人として、万博協会に援助

を申請し、数年間に9,000万円の助成金を送ったのでした。そのことを想起しつつ、われわれは、同研究所との学術交流を強化するとともに、同研究所にわが国から何らかの形で財政的助力がおこなわれるようになしたいと念願しております。

第二は、一般的な国際学術交流促進のために、小規模国際シンポジウムへの助成を拡大することあります。さまざまな分野でわが国の学界が重きをなすようになって、当番国として日本で国際学術会議を開催する機会が増してきました。これは国際学術交流のためには当然なことです。とりわけ小規模の国際シンポジウムは密度の高い交流に有効ですので、数の多い小規模国際シンポジウムのうち、基礎的なもの、将来性のあるものに対して全面的に支援するため、財団が主となって募金するという方式もとりたいと思います。

## § 2. 仁科記念財団のおこなっていること 七つ

### 1. 仁科記念賞贈呈

広義の原子物理学とその応用を中心とする研究分野における卓越した業績に対して銀メダルおよび副賞を贈呈する。

### 2. 仁科記念講演会の開催

ひろく原子物理学とその応用を中心とする学術の進展に関連し、かつ一般の関心事にもつながる諸問題を内容とした定例の記念講演会および同じ趣旨の地方講演会を開催する。(§ 3. 参照)

### 3. 仁科記念文庫の運営

当初は仁科博士の蔵書および寄贈によって追加された多量の図書を根幹としていたが、現在は、仁科記念室および朝永記念室にある多数の貴重な資料の整理を主としており、その成果を広く利用しやすくするための作業をおこなっている。

#### 4. 仁科記念奨励金の贈呈

- a. 小規模国際シンポジウム開催を援助し、
- b. 在外研究をする若い研究者に1年または2年間の滞在費および旅費を支給する。(§ 4. 参照)

#### 5. 外国のすぐれた学者の招聘

諸外国の指導的な科学者を招いて講演を依頼する。

#### 6. 中国留学生の援助

一般の奨学金とは異なる。東京大学大学院に入学したが、本国からの留学費がきれる前途有為の2人の学生のために募金した学界有志の個人募金が本財団に託された。それを寄附者の意向に従って支給する。

#### 7. 広報および調査

広報誌 NKZ その他講演記録等の出版 (§ 5. 参照)，および仁科博士をめぐる科学史資料の収集調査。

### § 3. 仁科記念講演会について

仁科記念財団は、湯川・朝永両ノーベル賞受賞者を育て、わが国の原子物理学の祖といわれる仁科芳雄博士（1890～1951）を記念して、逝去後5年を経て設立された財団です。その事業として仁科記念賞の贈呈、外国学者招聘およびわが国の若い研究者の海外派遣、研究奨励金の授与等をおこなっておりますが、それとならんで、公開講演会を、設立発起人会のとき以来、すでに30年続けて開催してきました。仁科博士の誕生日にあたる12月6日の前後に、定例の記念講演会を東京で催すほか、地方講演、高校理科教員のための講演会、外国の著名物理学者の来日のおりとか

朝永博士のノーベル賞受賞の際とかの特別講演会などを、隨時おこないました。

定例の仁科記念講演は、このたび昭和60年度で31回をかぞえることになります。学者の名を冠したこの種の講演会で古い伝統をもつものが、欧米にはいくつもあります。そのような講演は、永続してこそ真価が發揮されます。つぎつぎに育ってくる新しい世代が聴衆に加わるよう、年長の世代がその講演会の存在を語り伝え、白髪の老学者が若い聴衆と一緒に講演を聴く、というようになってこそ、文化的な国際的講演会と言えましょう。そのようになるためには、永続すること、伝統がつくりあげられることが肝要です。

仁科博士は倦むことを知らない啓蒙家でありました。博士もはじめはジャーナリズムが大きらいで、新聞記者をケンもホロロに追い返したり、わざとむずかしいことを言ってけむに巻いたりするくせがあったのですが、サイクロotronの建設をやるようになってからは、あちこちで講演したり、新聞・雑誌に書いたり、すこしも労を惜しまぬようになり、その豹変ぶりにはアッケにとられたと朝永振一郎博士は語っています。これは、巨大科学の研究費を得るためにだけではありません。一般社会に基礎研究の意義を理解させる必要を強く感じられたからであります。そのような講演に、門弟たちはしばしば宇宙線用の大きなサイズの計数管を持ってお伴をさせられたものです。

仁科記念財団の二代目理事長であった朝永博士は、師の仁科博士におとらず公開講演に熱心がありました。朝永博士の独特な話しぶりは聴衆を魅了したものでした。その名人芸とも言うべき話術は、落語を愛好したためと巷間伝えられていますが、もっと根本的には、博士があくまで直観的把握を重んじ、ものの考え方の本質を伝えることに努められたからであると言うべきでしょう。朝永博士が仁科記念講演会にいかに熱心であったかは、33回の講演会のうち9回までの講演をみずから引き受けられたことにもあらわれています。朝永博士およびそのほかの講演者たちの名講演の記録は、財団の初代理事長渋沢敬三氏の熱心な意見に従って発刊された財団の広報誌「NKZ」に掲載され、バックナンバーでそれらを読むことができます。バックナンバーのうちでもことに注目をひいているのは、朝永博士のノーベル賞受賞講演の日本語版とも言うべき1966年6月の特別講演の記録の載った「NKZ」No.7であ

ります。その講演はストックホルムでなさった英語の講演よりも倍も詳しくて「このある」ものであります（その号は需要が多いため再版されました）。

朝永博士は1978年病におかれ翌年7月に他界されましたが、病床にあっても仁科記念財団を気にかけられ、ことに記念講演会については、つぎのように言われました。

「仁科記念財団は社会に向かって開かれた窓を持たなくてはならない。記念講演会はその大切な窓の役割を果たすべきものだから、すくなくとも定例講演会は努力して続けるべきだ。随時の開催というのではルーズになりやすい。」

晩年、朝永博士は財団が準備するものとは別の、数多くの講演会で話をしておられましたが、仁科記念講演会については、そのような特別な意義を強調しておられたのです。

仁科記念講演会は、かつては「朝日講堂」のような大講堂を借りて、不特定な世間一般に向かって広報して来聴を待っていたのですが、朝永博士を失った財団は、いろいろ考えた結果新しい方式を試みることにしました。以前の方式では、世間が派手になったのに負けないだけの広報がむずかしく、ことに学生諸君には徹底しないうらみがありました。そこでたまたま朝日新聞社の移転で「朝日講堂」が使えなくなったりました。新しい方式にきりかえたのです。それはつぎのような方式です。

仁科記念講演会を学生や若い研究者の層に広く知ってもらうために、いわば「拠点校」の大学を輪番にきめて、すくなくともそこの学生は来聴しやすいようにする。まず都内の大学のいくつかに順々にお願いして会場を借り、その教授たちから学生に勧めてもらう。また他の大学の学生や若い研究者たちにも参加を呼びかける。異なる大学のあいだの壁は、大学紛争以来低くなっているし、またそのような壁がなくなるのは歓迎すべきことだから、その点でもこの「大学まわり持ち」の方式是有意義であろう。そうすれば二、三百名の聴衆は確実に集まるだろう。千人もはいる大きな講堂に不特定の聴衆の来場をむなしく待つよりも、小規模でも確実な聴衆が得られるほうがよいというわけです。

この方式にしてから、すでに定例講演会を6回、そのほかに同じ方式の地方講演

会を3回おこないました。幸いにして新しい方式は時宜に適していたと見え、どの講演会も、多数の学生聴衆を集めて盛大におこなうことができました。ことに喜ばしく感じたことは、講演後記入してもらったアンケートが回収率も非常によく、内容も充実していたことです。講演会の広報の仕方について、ポスターで知ったという答が多かったのは当然ですが、それとともに教授・先輩・友人から聞いたという答えがかなりあり、回を重ねるごとに増していることは、心強いことです。

第27回定例講演会のときのアンケートの感想・意見欄に、「このつぎは早稲田でやりましょう」と記されたのがありました。たぶん、大学院生か、若い教室員が書いてくれたのだろうと思いますが、第28回定例講演会は、はたして非常に活気がありました。「もっと質問の時間を」という要望もありました。その要望も、前回のときにくらべて時間的ゆとりがあったことが幸いして、十分に満たされました。そのうえ、講演後の茶菓の会を大学のほうで用意してくださり、講演者はそこでも長時間、大勢の若い人々の質問の相手をしてくださいました。これは従来見られなかった嬉しいことであり、今後のやりかたに示唆を与えるものと思います。いろいろな大学のかたからそれぞれの大学の特色を生かしたご協力をいただくことによって、仁科記念講演会をますますユニークな講演会として伝統を築きあげたいと思います。

#### § 4. 仁科記念研究奨励金について

この研究奨励金は、1979年度までは、原子物理学およびその応用に関する個人研究に対し、毎年数件、総額数百万円程度の援助をおこなってきました。将来性のある研究に対して、小額ながら、効果的な、いわば「呼び水」的な役割を果たしたものですが、1980年度からは、財団の財政的事情にかんがみて、小規模国際研究集会への援助のほうが、いっそう効果的であろうとの考えから、個人研究への援助は一時停止しました。基本財産の増額が達成され、財政的に余裕ができた暁には、個人研究の助成も復活させたいのですが、その場合、広報その他の点で十分な準備が必要と思われます。

小規模国際研究集会への援助については、その研究集会の場で、有望な個人研究の芽が生まれることを期待し得ることも、それを重視する理由の一つであります。そして、そのような国際研究集会への要望も、件数が増す一方なので、基本財産の増額による利子の増加をたよりにするだけでなく、具体的な研究集会の援助を目的とする募金を財団が主となっておこなう必要も生じてきました。

研究者海外派遣について述べますと、仁科記念財団の派遣する研究者は、単なる留学生というよりも、派遣された先の国でおこなわれる国際的共同研究の重要なスタッフとなっております。そして、仁科記念財団から派遣されたということが、先方の国の大手や研究所に助手等の形で就職した場合にくらべて、ずっとよく研究能率をあげることができるというのが、今までの海外派遣研究者の多くの人の声であります。

## § 5. 財団出版物の有料頒布について

公開講演会は、仁科記念財団の重要な事業の一つですが、その講演会に来聴できなかつた人のためも考えるべきであり、講演記録をぜひ出版する必要がある、というのが、初代理事長故渋沢敬三氏の強い願望でした。また公開講演会について二代目理事長故朝永振一郎博士は、これは財団が社会に向かって開いている大切な窓だから、手をぬいてはならないという持論でした。われわれは講演会活動を活発にし、おこなわれた講演はできるかぎり記録を出版するように努力しております。そして出版されたものは、できるだけ多くの人々に読んでもらいたいと念願しております。講演会の場合と同様、無料がよいという考え方もあるかも知れませんが、無料で頒布すればよく普及するというものではありませんので、有料といたします。そして、事務能力が不十分であることを考慮して、下記のようにしたいと存じます。

- (1) リストに載っているものを各冊一律に500円とする。
- (2) 郵送の場合、送料をリストに附記した概算で負担していただく。
- (3) 郵便振替を利用し、その用紙通信欄に、所属・職名等も記入していただく。

## § 6. 仁科記念財団の活動

### ——昭和 58 年度と 59 年度——

#### 1. 仁科記念賞

昭和 58 年度 下記 2 件 2 氏の研究に対して贈呈した。

受 賞 者 東京大学理学部教授 増 田 彰 正

研究題目 希土類元素の微量精密測定と宇宙・地球科学への応用

#### 推 薦 理 由

天然における希土類元素の存在パターンの解明は地球科学的に興味のある問題であるが、増田氏は希土類元素の相互存在比の変化と原子番号との間に、簡単かつ統一的な関係のあることを見出し、また隕石および地球の岩石における希土類元素の濃度比と原子番号との間に対数的直線性の存在することを指摘した。これは Corryell (米) の同様の発見よりも早い。増田氏は単にこの関係を見出したに止まらず、そのパターンの数字的解析と、それに基づく予測をおこなった点で独創的であり、優れている。

増田氏はさらに表面電離型質量分析計のイオン源等に独自の改良を加え、安定同位体希釈法の手法をとり入れて、希土類元素の高精度定量法を開発した。またこの方法を応用して、 $^{138}\text{La}$ - $^{138}\text{Ce}$  壊変系による新しい年代測定法を考案し、同様の原理、方法に基づく  $^{147}\text{Sm}$ - $^{143}\text{Nd}$  年代測定法とを組み合わせることにより、信頼度の高い年代測定を可能にした。

受 賞 者 フェルミ国立加速器研究所副所長 山 内 泰 二

研究題目 ウプシロン粒子の発見にたいする貢献

#### 推 薦 理 由

ウプシロン粒子は質量約 9.5 GeV のベクトル中間子でボトムクォークの束縛状態であることが確かめられている。この新粒子は 1977 年にレオン・レーダーマン氏の率いるコロンビア大学チームと、山内氏を実質的なリーダーとするフェルミ国立加速器研究所チームが協力して、同研究所の 400 GeV 陽子ビームを用いた実験で発

見された。この発見は発生粒子数の多い高エネルギーhadron衝突においてミュー粒子対のみを観測する方法でおこなわれたが、山内氏はこの実験の立案、準備、実施から新粒子の証拠の確定に至るまで、すべての面でレーダーマン氏と共に指導的役割を果たした。

この5番目のボトムクォークの発見により、クォークには第3世代が存在することが確立され、スタンフォード加速器研究所でのタウ粒子の発見と相俟って、クォーク-レプトン対称性がより明らかになった意義は大きい。またこの発見を契機として、ボトムクォークに関する研究がコーネル大学を始め世界各地の電子陽電子衝突装置を用いて精力的に展開され、重いクォーク間の力の解明に大きく寄与している。

昭和59年度 下記3件4氏の研究に対して贈呈した。

受賞者 東北大学理学部教授 石川義和

研究題目 中性子散乱による金属強磁性の研究

#### 推薦理由

石川氏は昭和34年頃より現在まで、一貫して磁性研究、特に中性子散乱による磁性研究を推進し、磁性研究の進展に多くの重要な業績を残してきた。その最も顕著な成果として次の二つを挙げる。

1. 早くより、ブースターを利用するパルス中性子線による磁性研究を提唱してきたが、のちに高エネルギー研究所（ブースター施設）におけるパルス中性子実験設備の建設に従事し、これを世界に先駆けて完成させた。

2. これまで、いくつかの典型的金属強磁性体、特に局在性の強いホイスラー合金系、さらに準局在モーメント系の  $\text{FePd}_3$ ,  $\text{FePt}_3$  などにおけるスピン波及び常磁性スピン励起についての中性子散乱による研究をおこなってきたが、その一環として、最近局在性の弱い強磁性体の典型である  $\text{MnSi}$  におけるスピン密度のゆらぎの動的性質を偏極中性子散乱により定量的に測定した。測定領域は全ブリュアン域、エネルギー及び温度はキュリー温度の約10倍に達し、重要な領域をすべて蔽っているという意味で、この研究はこの種の最初の完全な測定として注目される。これら一連の研究は、現在、最も困難な問題の一つとされている遍歴電子の強磁性の本質の解

明に重要な指標を与えるものとして重要視される。

受賞者 東京大学理学部助教授 江口 徹

コーネル大学助教授 川合 光

研究題目 格子ゲージ理論

#### 推薦理由

素粒子のすべての相互作用は非可換ゲージ理論で記述されるが、これを解析的に解くことは困難である。特に、強い相互作用の場合には摂動近似が使えないで、米国のウイルソンによって連続な時間空間を格子化する格子ゲージ理論が約十年前に提唱された。この理論は主に数値解法によって研究されており、解析的に解くことは困難である。

江口、川合両氏は素粒子のカラーの種類が無限に多い極限では、無限大の体積での格子ゲージ理論が無限小の体積での理論と等価になることを示した。この江口・川合の理論はきわめて簡単なので、その結果、格子ゲージ理論の構造を詳しく解明することが可能となり、素粒子論の進歩に大きく寄与している。

受賞者 学習院大学理学部教授 川路 紳治

研究題目 2次元電子系における負磁気抵抗および量子ホール効果の実験的研究

#### 推薦理由

半導体素子の中でも MOS (金属-酸化物-半導体) ダイオードは特に重要なものである。川路氏は MOS 半導体界面に形成される 2 次元電子系について二つの顕著な現象を見いだし、その微視的機構の解明にも大きな貢献をした。

一つは磁場をかけると通常とは逆に電気抵抗が減少する「負磁気抵抗効果」であり、それが磁場と界面のなす角度にどう依存するかをしらべるという、2次元性を利用した巧妙な手法により、電子のスピンではなく軌道運動がその原因であることをつきとめた。その後アンダーソン局在にもとづく負磁気抵抗の理論ができると、それによる精密な実験解析をおこない、見事な一致を得て、局在性を実証した。

また同じ 2 次元電子系において、理論により予測された量子ホール効果（電子数を連続的に増してもそれがある値の整数倍しかとり得ないかのように、ホール伝導

度が階段関数的に変化する現象)を, von Klitzing らとは独立に はじめて検証し, その後の大きな研究発展への契機をつくった。

## 2. 仁科記念講演会

昭和 58 年度

### a. ユトレヒト大学トホーフト教授を招いての講演会

(東京大学理学部物理学教室共同主催)

日時 昭和 58 年 7 月 22 日(金) 午後 3 時 30 分～5 時 (開場 3 時)

場所 東京大学理学部 4 号館 1220 号室

講演 Is Quantum Field Theory a Theory?

Gerard 't Hooft 教授

### b. イリノイ大学バーディーン教授を招いての講演会

(東京大学理学部物理学教室共同主催)

日時 昭和 58 年 10 月 26 日(水) 午後 4 時 30 分～6 時 (開場 4 時)

場所 東京大学理学部 4 号館 1220 号室

講演 Evidence for Quantum Tunneling in

Quasi-One-Dimensional Metals

J. Bardeen 教授

### c. 第 29 回定例講演会

日時 昭和 58 年 12 月 10 日(土) 午後 2 時～4 時 30 分 (開場 1 時 30 分)

場所 東京大学教養学部 11 号館 1106 号室

映画 「極微の世界を探る—トリスタン計画」

講演 「素粒子の素粒子(クォーク)をさぐる」

高エネルギー物理学研究所所長 西川 哲治

昭和 59 年度

### a. ソ連科学アカデミー物理学問題研究所リフシツ教授による講演会

(東京大学理学部物理学教室共同主催)

日時 昭和 59 年 4 月 13 日(金) 午後 4 時 30 分～6 時 (開場 4 時)

場所 東京大学理学部化学教室 講堂

講演 L.D. Landau—His Life and Work

E.M. Lifshitz 教授

b. 地方講演会

(神戸大学理学部、同教養部と共同主催)

日時 昭和 59 年 5 月 12 日(土) 午後 1 時半～4 時半 (開場 1 時)

場所 神戸大学教養部大講義室

講演 「宇宙のはじまり」

京都大学基礎物理学研究所教授 佐 藤 文 隆

映画 X線観測衛星「てんま」

c. プリンストン高級研究所ダイソン教授を招いての講演会

(東京大学理学部物理学教室と共同主催)

日時 昭和 59 年 10 月 17 日(水) 午後 3 時半～5 時 (開場 3 時)

場所 東京大学理学部 4 号館 1220 号室

講演 Origins of Life

Freeman J. Dyson 教授

d. 同上

(京都大学基礎物理学研究所、日本物理学会京都支部と共同主催)

日時 昭和 59 年 10 月 23 日(火) 午後 3 時半～5 時 (開場 3 時)

場所 京都大学基礎物理学研究所大講演室

講演 Origins of Life

Freeman J. Dyson 教授

e. 第 30 回定例講演会

日時 昭和 59 年 12 月 8 日(土) 午後 2 時～4 時半 (開場 1 時半)

場所 上智大学 8 号館 4 階 409 号室

映画 X線観測衛星「てんま」

講演 日本の X 線天文学

宇宙科学研究所教授 田 中 靖 郎

f. 1984 年度ノーベル物理学賞受賞者カルロ・ルビア教授による講演会

(東京大学理学部物理学教室共同主催)

日時 昭和 60 年 3 月 16 日(土) 午前 10 時～正午(開場 9 時半)

場所 東京大学理学部化学教室 講堂

講演 Discovery of Weak Bosons

Carlo Rubbia 教授(Harvard 大学および CERN)

### 3. 仁科記念奨励金

昭和 58 年度 下記 3 件のシンポジウムに援助した。

a. 対 象: 1983 RCNP International Symposium on Light Ion Reaction

Mechanism 1983 年 5 月 17 日～20 日

金 額: 1,500,000 円

代表者: 大阪大学核物理研究センター教授 小 方 寛

参加者: 国内 140 名, 国外 44 名

b. 対 象: International Symposium on Foundations of Quantum Mechanics

in the Light of New Technology 1983 年 8 月 29 日～31 日

金 額: 1,000,000 円

代表者: 東京大学物性研究所教授 中 嶋 貞 雄

参加者: 国内 120 名, 国外 46 名

c. 対 象: Cosmic Rays and Particle Physics 1984 年 3 月 19 日～23 日

金 額: 1,500,000 円

代表者: 東京大学宇宙線研究所教授 三 宅 三 郎

参加者: 国内 95 名, 国外 30 名

昭和 59 年度 下記 5 件のシンポジウムに援助した。

a. 対 象: 高エネルギー物理学の将来に関する国際セミナー 1984 年 5 月 14 日

～19 日

金 額: 1,000,000 円

代表者: 高エネルギー物理学研究所所長 西 川 哲 治

参加者: 国内 20 名, 国外 80 名

- b. 対 象：第 5 回国際放射薬品化学シンポジウム 1984 年 7 月 9 日～13 日  
 金 額：1,500,000 円  
 代表者：理化学研究所核化学研究室主任研究員 野 崎 正  
 参加者：国内 92 名，国外 105 名
- c. 対 象：“重イオン物理学”国際シンポジウム 1984 年 8 月 24 日～31 日  
 金 額：1,500,000 円  
 代表者：東京大学原子核研究所教授 西 村 奎 吾  
 参加者：国内 105 名，国外 71 名
- d. 対 象：“ソリトン系の力学的諸問題”に関する第 7 回京都サマー・インスティテュート 1984 年 8 月 27 日～31 日  
 金 額：800,000 円  
 代表者：京都大学基礎物理学研究所教授 牧 二 郎  
 参加者：国内 109 名，国外 22 名
- e. 対 象：固体表面吸着種の分光学的研究に関する国際シンポジウム 1984  
 年 9 月 3 日～6 日  
 金 額：1,200,000 円  
 代表者：関西学院大学理学部教授 山 田 晴 河  
 参加者：国内 66 名，国外 50 名

#### 4. 研究者の海外派遣

昭和 58 年度

北海道大学工学部助手 住 吉 孝

留 学 先 ハーン・マイトナー研究所（西ドイツ）

研究目的 放射線化学初期過程の研究にピコ秒の時間分解能を有する電気伝導法を用い、従来からの種々の高速分光法とあわせて詳細な解明をおこなう。

〔昭和 57 年度派遣研究者の留学期間延長〕

東京大学大学院理学系研究科博士課程 3 年 手 嶋 久 三

留 学 先 フェルミ国立加速器研究所（アメリカ）

研究目的 anomalous Ward identity における発散の処理の再検討及び dynamical Higgs mechanism の模型と 100 GeV 領域の現象への反映

昭和 59 年度

立教大学理学部、日本学術振興会奨励研究員 鈴木 昌世

留学先 CERN (スイス)

研究目的 電離放射線励起および光励起に基づく希ガス・シンチレーション  
(混合系、凝縮相を含む) に関する実験的研究

東京大学理学部、日本学術振興会奨励研究員 梁成吉

留学先 ニールス・ボア研究所 (デンマーク)

研究目的 格子量子色力学、クォーク・グルオンの力学系の非摂動的構造の  
解明

## 5. その他

昭和 58 年度

仁科博士帰国直後から戦後までの期間にわたる Hevesy 教授との往復書簡を載せた冊子 "G. Hevesy—Y. Nishina, Correspondence 1928—1949" —Publication No.17 および広報誌 "Nishina Kinen Zaidan" 18 を出版した。

昭和 59 年度

コロンビア大学名誉教授ウー (吳健雄) 女史の講演 (1983 年 4 月) の記録 "The Discovery of the Parity Violation in Weak Interactions and Its Recent Developments" —Publication No. 19 および仁科博士帰国直後から戦後までの期間にわたる N. Bohr 教授および周辺の人々との往復書簡を載せた冊子 "Y. Nishina's Correspondence with N. Bohr and Copenhageners 1928—1949" —Publication No. 20 と滞欧中の仁科博士の書簡を載せた冊子 "Y. Nishina's Letters to N. Bohr, G. Hevesy and Others 1923—1928" —Publication No. 21 を出版した。

§ 7. 「財団法人仁科記念財団設立趣意書並びに寄附行為」(抄)

委大第 164 号

財団法人 仁科記念財団

設立代表者 渋沢 敬三

昭和 30 年 11 月 10 日付で申請のあった財団法人仁科記念財団の設立を民法第 34 条によって許可します。

昭和 30 年 12 月 5 日

文部大臣 清瀬 一郎

**財団法人仁科記念財団設立趣意書**

文化勲章受賞者、日本学士院会員故仁科芳雄博士は、わが国の原子物理学の創始者であり、湯川博士等、世界的学者の育ての親でありました。博士が戦前、当時世界で第一級の大サイクロトロンを建設されたことは、そのサイクロトロンの悲劇的最後とともに、あまねく世に知られているところであります。

故仁科博士は、世界的な原子物理学者であったのみならず、戦後国歩艱難の時期に際しては、旧財団法人理化学研究所を潰滅の危機から救って株式会社科学研究所を興し、科学技術こそ国の経済復興の原動力であるという信念を貫かれ、身をもってこれを実践されました。博士はまた、その学識と円満な人格によって世界の学界の信望を一身にあつめられ、博士の存在がわが国の国際社会へのすみやかな復帰に大きな助けとなったことも、永く忘れる事のできない点であります。

おもうに科学技術の振興は、国の自立復興上、万難を排して成し遂げなければならぬ喫緊事であります。なかんずく、博士が生前心血をそそがれた原子物理学が、人類文明にとっていかに重大な影響を与えつつあるかは、万人のよく知るところであります。原子力の重要性はいうまでもありませんが、原子物理学は今日先進諸国においては、生物学、工学、農学、医学等に広く応用されるほか、生産技術の方面

にも根本的変革をもたらしつつあり、この分野の著しい立ち遅れを克服することは、わが国の当面する重要課題の一つであります。

以上の趣旨により、今回私共は故仁科博士を記念し、原子物理学とその応用に関する研究の振興を目的として、仁科記念賞の授与、研究奨励金の交付、海外学者の招聘、研究者の海外派遣、記念文庫の設置、記念講演会の開催等の事業を行うために、広く各界からの御寄附を仰いできましたところ、国内および海外各方面から多数の方々の御賛同をえて、ここに 2000 万円に達する募金をみると至りました。「仁科記念財団」はこの寄附金と故博士の蔵書とをもって設立されるものであります。

昨今わが国においても原子力の平和利用が声高く叫ばれておりますが、その健全なる発展は基礎科学とその応用との調和なくしてはこれを望むことはできません。この調和こそ故博士の理想とせられたところであり、本財団は必ずやその成果を上げ、わが国科学技術の発展に寄与するのみならず、世界の原子物理学の進展に貢献せんとするものであります。

#### 財団法人仁科記念財団寄附行為（抄）

##### 第1章 総 則

第1条 この法人は、財団法人仁科記念財団という。

第2条 この法人は、事務所を東京都文京区本駒込2丁目28番45号におく。

##### 第2章 目的および事業

第3条 この法人は、故仁科芳雄博士のわが国および世界の学術文化に対する功績を記念して、原子物理学およびその応用を中心とする科学技術の振興と学術文化的交流を図り、もってわが国の学術および国民生活の向上発展、ひいては世界文化の進歩に寄与することを目的とする。

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 原子物理学およびその応用に関する研究において、きわめて優秀な成果を収め

- た者に対する仁科記念賞の授与
2. 原子物理学およびその応用に関する仁科記念講演会の開催
  3. 原子物理学およびその応用に関する図書を蒐集公開する仁科記念文庫の経営
  4. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う研究機関および個人に対する仁科記念奨励金の授与
  5. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う学者の招聘および海外派遣
  6. 原子物理学およびその応用に関する知識の普及を目的とする出版物の刊行
  7. その他前条の目的を達成するために必要な事業

### 第3章 資産および会計

第5条 この法人の資産は、次のとおりとする。

1. この法人設立の当初に仁科記念財団設立発起人会が寄附した別紙財産目録記載の財産
2. 資産から生ずる果実
3. 事業に伴う収入
4. 寄附金品
5. その他の収入

第6条 この法人の資産を分けて基本財産および運用財産の二種とする。

基本財産は、別紙財産目録のうち基本財産の部に記載する資産および将来基本財産に編入される資産で構成する。

運用財産は、基本財産以外の資産とする。ただし、寄附金品であって寄附者の指定あるものは、その指定に従う。

第7条—第10条 略

第11条 この法人の決算は、会計年度修了後2ヶ月以内に理事長が作成し、財産目録、事業報告書および財産増減事由書とともに監事の意見をつけて理事会の承認を受け文部大臣に報告しなければならない。

この法人の決算に剰余金があるときは、理事会の議決を経て、その一部または全部を基本財産に編入し、あるいは翌年度に繰越すものとする。

## 第12条—第13条 略

## 第4章 役員、評議員および職員

第14条 この法人には、次の役員をおく。

理事 20名以上25名以内（内理事長1名、常務理事3名以内）

監事 2名以上4名以内

第15条 理事および監事は、評議員会でこれを選任し、理事は、互選で理事長1名、常務理事3名以内を定める。

第16条 理事長は、この法人の事務を総理し、この法人を代表する。

理事長に事故があるとき、または理事長が欠けたときは、理事長があらかじめ指名した常務理事が、その職務を代行する。

常務理事は、理事長を補佐し、理事会の決議に基いて日常の事務に従事する。

第17条 理事は、理事会を組織し、この法人の業務を議決し執行する。

第18条 監事は、民法第59条に定める職務を行う。

第19条 この法人の役員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

補欠による役員の任期は、前任者の残任期間とする。

役員は、その任期満了後でも、後任者が就任するまでは、なお、その職務を行う。

役員は、この法人の役員たるにふさわしくない行為のあった場合、または、特別の事情のある場合には、その任期中でも評議員会および理事会の議決によってこれを解任することができる。

第20条 役員は、有給とすることができます。

第21条 この法人には、評議員60名以上70名以内をおく。評議員は、理事会でこれを選出し、理事長が委嘱する。評議員には、第19条を準用する。この場合には同条中「役員」とあるのは、「評議員」と読み替えるものとする。

第22条 評議員は、評議員会を組織し、この寄附行為に定める事項のほか、理事会の諮問に応じ、理事長に対して助言する。

第23条 この法人に顧問若干名をおくことができる。顧問は、理事会でこれを選出

し，理事長が委嘱する。

顧問の任期については第 19 条を準用する。この場合には，同条中「役員」とあるのは，「顧問」と読み替えるものとする。

第 24 条 この法人に事務を処理するために書記等の職員をおく。

職員は，理事長が任免する。

職員は，有給とする。

## 第 5 章 会 議

第 25 条 理事会は，毎年 2 回理事長が招集する。ただし，理事長が必要と認めた場合，または理事現在数の 3 分の 1 以上から会議の目的事項を示して請求のあったときは，理事長は，臨事理事会を招集しなければならない。

理事会の議長は，理事長とする。

第 26 条 理事会は，理事現在数の 3 分の 2 以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし，当該議事について書面をもって，あらかじめ意思を表示した者は，出席者とみなす。理事会の議事は，この寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか，出席理事の過半数をもって決し，可否同数のときは議長が決する。

第 27 条 次に掲げる事項については，理事会において，あらかじめ評議員会の意見を聞かなければならない。

1. 予算および決算に関する事項
2. 不動産の買入れ，または基本財産の処分に関する事項
3. その他この法人の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めた事項

第 25 条および前条は，評議員会にこれを準用する。この場合には，第 25 条および前条中「理事会」および「理事」とあるのは，それぞれ「評議員会」および「評議員」と読み替えるものとする。

第 28 条 すべての会議には，議事録を作成し，議長および出席者代表 2 名が署名捺印した上で，これを保存しなければならない。

## 第6章 寄附行為の変更ならびに解散

第29条 この寄附行為は、理事現在数および評議員現在数のおのおの3分の2以上の同意を経、かつ、文部大臣の認可を受けなければ、変更することができない。

第30条 この法人を解散するには、理事現在数および評議員現在数のおのおの4分の3以上の同意を経、かつ、文部大臣の許可を受けなければならない。

第31条 この法人の解散に伴う残余財産は、理事全員の合意を経、かつ、文部大臣の許可を受けて、この法人の目的に類似の目的を有する公益事業に寄附するものとする。

## 第7章 補 則

第32条 この寄附行為の施行についての細則は、理事会の議決をもって別に定める。

### 付 則

第33条 この法人設立当初の理事および監事は、次のとおりである。

理事(理 事 長)渋 沢 敬 三	理事(常務理事)朝 永 振一郎
理事(常務理事)村 越 司	石 川 一 郎
理事 植 村 甲午郎	亀 山 直 人
理事 酒 井 杏之助	瀬 藤 象 二
理事 原 安三郎	藤 山 愛一郎
理事 我 妻 栄	茅 誠 司
監事 武 見 太 郎	二 見 貴知雄

昭和34年6月1日 一部(事務所所在地)変更認可

昭和41年11月8日 一部(理事および評議員の定数)変更認可

## 役員名簿

(昭和 60 年 3 月現在)

理 事 長	久保 亮五	宮崎友喜雄		
常 務 理 事	玉木 英彦	安藤 豊禄	飯尾 正宏	稻山 嘉寛
理 事	芦原 義重	太田新太郎	鹿島 昭一	鎌田 甲一
	井上 薫	佐波 正一	田島 英三	南部 政二
	茅 誠司	鳩山 道夫	浜田 達二	林 主税
	野地 紀一	平岩 外四	藤吉 次英	堀田 庄三
	土方 武	宮島 龍興		
	三田 勝茂	小山 五郎	佐々木秋生	瀬川美能留
監 事	池田 長生	芦原 義重	有山 兼孝	安藤 豊禄
評 議 員	赤堀 四郎	池田 長生	石橋幹一郎	伊藤 達二
	飯尾 正宏	井上 薫	岩佐 凱実	植村 泰忠
	稻山 嘉寛	太田新太郎	小田 稔	鹿島 昭一
	江戸 英雄	上坪 宏道	茅 誠司	木村健二郎
	鎌田 甲一	小谷 正雄	小林 稔	小山 五郎
	久保 亮五	佐々木秋生	佐波 正一	杉本 正雄
	坂井 光夫	関本 忠弘	竹内 柒	竹中 錬一
	瀬川美能留	玉木 英彦	中根 良平	南部 政二
	田島 英三	西島 和彦	西村 純	野地 紀一
	西川 哲治	鳩山 道夫	浜田 達二	早川 幸男
	花村仁八郎	土方 武	平岩 外四	弘世 現
	福井 伸二	藤井 忠男	伏見 康治	藤吉 次英
	堀田 庄三	三浦 功	三田 勝茂	宮崎友喜雄
	宮島 龍興	向坊 隆	山崎 敏光	山本源左衛門
	芳田 奎	和田 昭允		
顧 問	村越 司			

財団法人 仁科記念財団

113 東京都文京区本駒込2丁目28番45号  
電話 東京03(946)7111(代表)  
郵便振替番号 東京3-135934

(1985年3月) 1,000